

この人について

常滑焼 四代山田常山氏



(よんだい やまだ じょうざん) 1954年 愛知県常滑市に生まれる。1986年 東京銀座和光にて父子展、1995年 東京青山「ギャラリー西福」にて個展、以後隔年開催、2000年 NHK趣味悠々「窯場めぐりでやきものに親しむ」出演、2001年 日本橋三越本店美の饗宴「陶」食のうつわ展に出品、2002年 日本橋三越本店にて個展、2006年 四代常山襲名記念作陶展を日本橋三越本店特選画廊にて開催、2007年 名古屋名鉄百貨店にて24回目個展（84年より毎年開催）、2010年 11月東京銀座和光にて個展。

「一本日は、お忙しい中、「この人にきく」にお時間を取っていただきありがとうございます。」

また、先生の個展会場にて、「先生の作品を拝見しながら」というすばらしい機会をいただきましたこと御礼申し上げます。

早速ですが、先生の陶磁器を始められたきっかけをお聞かせください。

常滑焼の窯元の子供として生まれ、身の回りには陶磁器を作る道具や材料、窯などがそろっていたことに加えて、モノづくりや絵を描くことが大好きでしたので小さな頃から陶磁器を作っていました。そのため始める「きっかけ」といえるようなきっかけはなかったように思います。父である三代目山田常山（人間国宝）にも特に陶磁器を勧められたこともありませんでした。

きっかけではありませんが、しいて上げるなら、モノづくりや絵を描くことなどが自分に合っていたということでしょうか。何事も好奇心や興味を持っていなければ長く続かないですし、技術は向上しないように思います。

「先生は平安時代末期頃からつくられる常滑焼を作陶しておられますがその魅力は。」

常滑焼は六古窯の一つとして知られ、焼かれていた日本独自の焼物で、瀬戸以外はすべて「しめ焼き」をしています。しめ焼きとは成形したものにうわぐすりを施さず、焼成して吸水率がほとんどなくなる位焼きしめることです。この焼成は、薪で焚く登り窯を使用するため、焼成過程で焼物に薪から灰が飛んでふりかかり、素地と反応してうわぐすりのようになっております。灰がかかることで光沢や色合いを表現させるために、再現は難しいですが独特の渋味や風合いを持っているところが魅力です。このような登り窯で焼成した常滑焼は、電気窯やガス窯では絶対に出せない味わいがあり、思い通りの作品ができるかどうかといったことも、楽しみながら作っています。

「先生は、どのようなものの作陶活動を精力的に進められてこられたのでしょうか？」

私が長年こだわって製作してきたのは花入です。最初、父親が常滑焼のなかでも急須作りで極め、人間国宝となっているので急須を作っていたのですが、自分のオリジナリティーを出していきたいと思い、他の焼物に取り組みたいと考えていました。その頃、よく自分の焼物に花を生けてくれる方がいらっしゃり、その花に合うような焼



図1 手付花入



図2 常滑焼（花入、小鉢、丸皿）

物を作陶したいと取り組んでいました。このため初めて自分の個展を行う際にはテーマを花入で行いました。このとき好評であったことに加えて、生け花の先生方との良い出会いがあり作陶活動に拍車がかかりました。なかでも圓照寺を家元とする山村御流のいけばな展で展示される作品を見て刺激を受けました。このため山村御流のいけばな展と同時期に個展開催して展示されるいけばなに合った花入を作ることを目指してきました。また四季折々の花の種類やいけばなの型などを学びそれらに合うような花入の作陶に取り組んできました。

—展示作品に花入が多く展示されていることから伝わってきます。また、ここには花器以外にも食器も多く展示されていますが、食器に対するこだわりといったものはどうでしょう。

食器も好きで、力を入れて取り組んできました。名古屋に「八勝館」という北大路魯山人の器を多く所有する料亭がありますが、20歳代の頃にそこから「北大路魯山人の備前焼風の常滑焼ができないか。」と依頼されたのがきっかけでした。常滑焼も備前と同様に無釉で焼きしめた器であったことから、北大路魯山人の作品に似た食器製作を依頼されたわけです。私は、魯山人本人の器をお借りして、どのような思いで作陶したのか思いをはせながら作陶しました。最初は四角の皿でしたが、これが思った以上に魯山人風にできました。ここで気に入っていただけたことから、次々と「割山椒」、「木の葉皿」の製作を依頼されました。しかし魯山人の割山椒や木の葉皿の形状は大胆で、「魯山人はどうやって作陶したのだろうか？」など考えさせられる点が多く、ここでいろいろと勉強しました。ただこの経験のおかげで多くの方に自分が作る作品に興味を持っていただくとともに、評価していただけたように思いますし、このとき意欲的に作陶したことで技術的な蓄積ができ、今の自分の基礎が培われたとも思います。

—先生がこれまででもっとも苦労されてきた点はどのようなところでしょうか。

自分にとって苦労したと思うことはほとんどありません。たしかにいろいろと考え、思うようにならないことや予想しないような現象が起こったこともありますし、成形、焼成で失敗することもありました。しかし焼成の失敗がなぜ起こったのか、失敗しないようにするには窯詰めはどうしたらいいのかなど常にいろいろ考えながら取り組んできました。登り窯での焼成にしても季節や気温、湿度、窯の位置、詰め方などいろいろな影響を受けます。これら一つ一つをノートにチェックして参考にし、次の作品に活かそうとしていますが、それでも予想しないようないろいろなことが起こります。しかしこの起こったことがなぜなのか、どうすればよいのかなど考えることも楽しみです。問題となったことをいろいろ考えて修正していくことを今は楽しんでいます。

—強い興味を持って行えば、苦労も楽しみに変わると言ったところでしょうか。先生の失敗を恐れない非常に前向きな姿勢と探求心による経験の積み重ねによって技術が蓄積し、次の作品へとつながっているわけですね。

作陶の積み重ねもありますが、先ほどお話ししました八勝館が所有する魯山人の作品など本物を手に触れて見ることができたことも蓄積の一つでした。普段は写真やガラス越しにしか見ることができない作品を実際に手に持って観察することで、先人たちがどのような考えで作陶しているのか、同様な手さばきだったのか、五感を使っていろいろと考察し、試すことを繰り返すことができたことが今の私につながっていると考えています。

蓄積という点では、いけばなや野草、料理など器を使う側の方々をはじめ、異分野の方と知り合うことができたこともその一つです。おなじ作陶をする人、同じ分野の方からの意見は素直に聞き入れないこともあるかもしれませんが、異分野の方からの意見は自分が考えも及ばない視点からの意見も多く、素直に聞くことができました。また陶磁器に限らずいろいろな物には作り手の思いがあると思うのですが、これを知る良い機会となりました。このような異分野の方々とは多く接して、いろいろな勉強ができたことは、私の作陶活動の糧になっていると思います。

また陶磁器には、使う人の思いを盛り込むことも重要と思います。花器には花を扱う人の思い、食器には食べ物を扱う人の思いがありますし、家庭の奥様方には使いやすさという点も重要なポイントだと思います。父が作っていた急須は形状的に素晴らしいと思いますが、それ以上に偉いと思うのは、使う人や使う時の様子を考えながら作陶していた点です。肉厚だと重くなり扱いにくくなりますし、と言って薄手すぎると強度が弱くなるため、すぐ欠けたり割れたりして実用的ではなくなります。陶磁器は、飾るだけでなく、使って楽しむ

ということも重要ですので、使っていただいている方にいろいろな意見をお聞きして勉強することも必要だと思っています。

—広い視点で物事を考え、その後の対応に反映させていくところはどの分野でも同じかもしれませんね。その考え方は、作陶にかぎらず、研究開発に携わる者にも言えることだと思います。これまでお伺いした取り組み以外でこれからこだわって作陶してみたいのはどのような物でしょうか。

壺やワインクーラーといったやや大きな作品をやってみたいと思っています。常滑焼は大きな壺などが有名なこともあり、以前個展のテーマとして提案されたことがきっかけです。正直、壺はあまり評価されないと思っていましたが、想像以上に好まれる方が多いことも要因の一つです。ワインクーラーも酒席などで使用できる作品はできないかという提案でした。多様化している生活様式で使われる物を想定することは自分一人で考えることは難しいのですが、自分の作品を使って頂いたり、見て頂いた方々から、いろいろな場面で使ってみたいとの要望がありますので、そのようなお客様にも喜んで頂ける作品をつくっていきたくて考えています。

—これからのセラミストや陶磁器作家を目指している若者にアドバイスをいただきたいのですが。

これまで述べてきたことでしょうか。若い方に聞かれたことなどは隠すことなく教えていますが、良い物を広い視野で見る機会をより多く持ち、それらがどのようにして作られて



図3 常滑焼（ワインクーラー、酒器、盆）

いるか考え、自分の作品に反映させていくことが大切ですね。また、いろいろな分野において第一人者としてがんばっている方の意見を多く聞くことも重要です。その上で探求心と向上心を持って取り組んでいただきたいと思います。

つまり、がんばっている人に聞くということは、自分自身も対等に質問できるくらいにがんばらないとだめですし、聞いた後は、それを参考にして、今まで以上にがんばるということですね。

また材料の組成や成形から焼成まで逐一ノートにとって、どのようにして作陶したか記録を残していくことも大切です。思うとおりのものができても、できなくても条件をふり返ることができます。焼きしめをしていることもあり、灰のかぶり方など意図的にできないことも多いですが、どのような作品をどのようにして成形し、焼成したか再現できるようにすることが重要です。

—陶芸作家に限らず、研究に対しても通ずる部分がありますね。私たちも参考にしていきたいと思っています。ところで、山田先生は、今後どのような活動されたいと考えられていますか？

個展を毎年行って見ていただいています。個展を始めてからずっと心がけていることは、お客様がいつまでも興味を持っていただけるような作品作りです。このためには継続的な探求心を持ってこれまでにない斬新な作品を作陶していきたいと考えています。

多くの作品をみたり、異なる分野の方々の話を聞くことで、まだまだいろいろなアイデアがでできますので、作品を通して表現できればと思います。

また陶磁器は日常で使われる物だと思いますので、好まれて使っていただける物を作陶していければと思います。

—多くの人に愛される作品を作り続けるには、何事も日頃から探求心を持ち、強い興味を持っていろいろな角度から物事を考え、向上心を持って取り組むことや、いろいろな分野で第一人者として頑張っている人のご意見を聞きながら物事を進めることが非常に大切なことがよくわかりました。本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

(インタビュー：編集委員：
笠井清人、土屋哲男、尾畑成造)